

知音 (zhīyīn) とは「互いによく理解し合った親友。自分の才能を認める人」の意。「琴の名人伯牙は親友の鍾子期が亡くなると、自分の琴の音を理解する者はもはやいない、と愛用していた琴の糸を切って再び弾くことはなかった」という中国春秋戦国時代 (B. C. 770- B. C. 221) 末期に著された『列氏』、『呂氏春秋』中の故事に由来する。

知音

余顕斌

(訳 横田勤・萩田麗子)

雪は深く夜は静かだった。火の手が家の裏手から上がり、またたく間に彼のあばら家を包み込んだ。彼は逃げだした。持ち出すことができたのは一丁の二胡だけであった。

彼は振り返らなかった。振り返ったとして何も見えはしない。彼は目が見えなかったのだ。風に吹かれて全身が冷たくなった。風の中で、彼は一步一步進んでいき、ついに一つの黒い点となり、はるか彼方に消失した。

この時以来、彼は異郷を放浪していた。

彼は古びた一丁の二胡を伴い、小さな町や村を巡りつづけていた。彼が通ったところを、蜘蛛の糸のようにか細く、何かを訴えているような低い二胡の音が流れていく。

夜になると彼は古い廟に宿を取り、草を敷き詰め、その上に静かに座り、見えない目で微動だにせず空虚を見つめる。そして指が動きはじめると、水色の月の光の中に、琴の弦から流れ出てきた音が、波紋をつくり、それは広がり、漂っていく。

彼は行く先々で、残りもののご飯、あるいは冷たくなった饅頭を二個恵んでも

らう。

そしていつも半分を食べ、半分は残し、自分が寝泊まりする場所の、草を敷いたそば、あるいは廟の中に置いておく。二日目、そこを立つ時には、そのままにしておく。

「あの人はくだらないことにこだわりを持っていて、前の日の残りものは食べないのだ」と人々は言った。

だが彼は何も弁明せず、ただ頭を振ってため息をついていた。食べ物をもらう時にはいつも少しの量を求め、夜を過ごす場所に持って帰った。少し残してそこに置いておき、量が少なかったときには、自分は食べずにもらってきた物をそのまま置いていた。

雪が降ったある日のことだった。彼は目まいを起こして倒れた。目が覚めると、少女の澄んだ美しい声が響いてきた。「やっと目を覚ましたんだね」

彼はうなずくと、ゆっくりと起き上がって座った。とても感謝した。だが礼として与える物が何もないので、二胡を手にとると目を閉じて指を動かした。二胡から穏やかな、何かを物語るような調べが流れ出てきた。

曲が終わった。すべて静かだ。

しばらくして少女は我に返り、彼の演奏を褒め讃えた。「とってもよかった。わたし、親方に言ってくる。わたしたちの雑技団について来て」こう言い終わると風のように駆けていった。

ほどなく少女は戻ってきて、座った。

彼はちょっと笑って言った。「目の見えぬ者は受け入れないんだろう？」「そうなの。雑技団がぼろの二胡弾きを連れて行ってどうする、って。でも心配しないで。もう一度、親方の奥さんに頼んでみるから」

彼は少し笑った。少女が行ったあと、ひっそりとそこを立ち去った。そして一歩一歩、遠ざかっていった。二胡の音は水のように、ずっと彼の後を流れていった。時も二胡の音色の中に流れ込んでいった。

彼は^{こっじき}乞食をしながら流浪の旅の中で、ゆっくりと年老いていった。

ある日、古びた廟の中で、彼が男の体を手で撫でると、もう息も絶え絶えであった。その男が飢えているのがはっきりとわかった。彼は急いで、恵んでもらった^{マントウ}饅頭を取り出し、彼に食べさせた。二つの冷えた饅頭を食べ終わると、彼は元氣を取り戻し、起き上がって座った。その夜、そこに居るのは彼とその男の二人

だけだった。彼は祭壇の前に座り、指を軽く動かした。二胡の音が二滴こぼれ出て、きらきらときらめいた。それから二胡の音は高くなり、静かな夜空に響きわたり、しばらくのあいだ花の香りのように人の心をそっと撫で、そよ風のように、薄絹のように漂っていた。

その男は静かに聴いていたが、かすれた声でため息をついて言った。「『月夜鳥鳴』ですね。本当にこの世で最高の技です！」

彼はちょっと笑い、見えない目をぱちぱちさせて衣服を着たまま横になって言った。「もう寝ましょう。明日、また乞食こっじきに出ますから」

その男も眠った。

それ以後、彼は二胡を弾きわずかばかりの金を稼ぎ、その男を養った。なぜならその男も目が見えなかったからである。夜になると古ぼけた廟の中で、彼が二胡を弾き、その男が聴いている。苦しい流浪の旅のなかで、彼は一日一日と、命の最後の時に向かっていった。その日、彼は何度か血を吐き、草の山にもたれて男に言った。「お前は『松風流水』の譜が欲しいのではないか？ 今日、お前のために弾いてやろう」

「あなたは どうして知っているんですか？」男は驚いて尋ねた。

「お前は目が見えない。右手の人差し指に胼胝たこがある。それは二胡を弾いている者のものだ。この世で私の二胡がわかる者は二人だけ、一人はある少女、もう一人は私の弟子だ」と彼は言った。その顔には暖かさがあつた。

「お師匠！」男はひざまずき、はっきりとした声で涙を流しながら叫んだ。

彼はうなずいてわずかに笑った。「お前は度々『松風流水』の譜をくれと言った。そして、私が譜を持って逃げざるを得ないようにするために、ひそかに私のあばら家を燃やした。途中で盗めるとでも思っていたのかな？ ああ、お前、この世で最もすばらしい譜は紙の上にはではなく、心の中にあるのだ。この数年、お前が後ろについてきていたことを私は知っていた。知らぬふりをしていたのは、お前に苦勞をさせて時間を長くかければ、私が当時言ったことを理解できるだろうと思ったからだ」

「あなたが食事を残したのは、私に与えるためなのですよ？」男はむせび泣きながら尋ねた。

「お前は非常に恥ずかしがり屋だから乞食こっじきはできない。餓えて死ぬかもしれん」彼はおだやかな表情のままだった。

彼が話し終わると二胡の音が流れ出た。初めは蚊が飛んでいるようで、それから水が流れるが如くになり、最後に光り輝く春の光のようなきらめきを放った。

そしてその楽はだんだんと低くなり地下に流れ込み、果てしなく広い無音の世界となった。

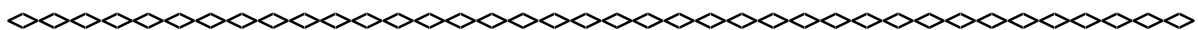
二胡が下に落ち、彼は倒れた。

「あなたは私が誰だか知っていたのに、どうして私を恨まないのですか？」男は彼を抱きながら大声で泣き叫んだ。

「お前は私の弟子であり、私の知……音だからだ」彼は笑みを浮かべ、息を引き取った。

男はひざまずき、うやうやしく彼に拝礼した。そして二胡を手を取った。月夜に、二胡の音が波のようにきらめきながら、大地を流れていった。

(『2010年中国微型小説精選』長江文芸出版社, 武漢市, 2011, pp. 14-16.)



(中国語原文)

知音

余显斌

雪，很大，夜很静。一把火，从他房后烧起，一眨眼间，席卷了整个茅屋。他跑出来，随着他的，只有一把二胡。

他没有回头，即使回头，也看不见什么，因为他是瞎子。风吹来，浑身很冷。在风里，他一步步走了，最终，变成一粒黑点，消失在天边。

从此，他漂流异乡。

陪伴他的，是一把破旧的二胡，小镇村庄，一路行来。二胡声，在他走过的地方流泻，如一声声低低的诉说，细细的，蛛丝一样。

夜里，他歇宿在破庙里，草堆后，静穆地坐着，一双盲眼，一动不动，望着虚空。手指颤动，一缕月光水色，从琴弦上淌出，闪着波纹，扩散着，荡漾着。

他走过的地方，要一点剩饭，或者两个冷馒头。

一般的，他只吃一半，另一半，放在自己寄宿的地方，草堆旁，或者是

破庙里。第二天走时，留在那儿。

大家都说，这瞎子，穷讲究，不吃隔夜东西。

他没说什么，摇头叹息。要饭时，仍多要些，拿回寄宿的地方。剩下一些，放在那儿。有时，要少了，他不吃，把要来的东西都放那儿。

这日，一个雪天，他头晕眼花，倒了下去。醒来时，一个女孩的声音，清脆地响起，醒了，你终于醒了。

他点头，慢慢坐起来，很是感激。无物感谢，就拿起二胡，闭着眼，手指颤动，一支乐曲，婉约流淌。

曲子停止了，一切都静静的。

过了很久，女孩子醒悟过来，赞叹，你的二胡拉得真好啊，我去告诉师傅，你就跟着我们杂技团吧。说完，女孩一阵风，跑了。

不一会儿，女孩进来了，坐下。

他一笑，道，不收瞎子吧？是啊，一个杂技团要一个拉破二胡的干舍呀？

你别急，我再求求师娘。女孩说。

他笑笑，在女孩离开后悄悄走了，一步一步，走向流浪的远方。二胡音，仍如水，随他流淌。时间，也在二胡声中流淌。

他在乞讨和流浪中，慢慢老去。

一日，在一个破庙里，他摸着个人，睡在那儿，奄奄一息。显然，是饿的。他忙拿出讨要的馒头，喂他吃下。两个冷馒头下肚，那人有了精气神，座起来。那夜，没有旁人，只他俩。他坐在神案前，手指轻弹，两滴乐音溅下，闪着晶亮的光。然后，二胡音悠扬，在静静的夜空响起，一会儿如一缕花香，拂过人心；一会儿如一丝轻风，浮荡如纱。

那人静静听着，罢了，哑着嗓子一声长叹，是《月夜鸟鸣》吧，真是人间一绝！

他笑笑，眨眨已盲的眼，和衣躺下，道，睡吧，明天，还要讨饭呢。

那人，也睡下。

以后，他拉二胡，挣点小钱，养活两人，因为那人也是瞎子。夜里坐在破庙里，他拉二胡，那人听。在奔波中，一天一天，他走向生命的尽头。那天，他吐了几口血，靠在一个草堆旁，对那人说，你不是想得到《松风流水》的乐谱吗？今天，我给你拉。

你——怎么知道？那人惊问。

你是瞎子；右手食指有弦痕，是拉二胡的；在这个人世，能欣赏我二胡的，只有两人，一个是个女孩，另一个是我的弟子。他道，脸上有一丝温馨。

师父！那人跪下，不再哑着嗓子，流着泪喊。

他点头，微微一笑，你多次向我讨要《松风流水》的音谱。又悄悄一把火烧了我的茅屋，不就是想逼我带着乐谱逃走，你好中途盗取吗？哎，世间最好的乐谱不在纸上，在心中。这些年，你跟在后面，我知道。没说破，是想让你跟着吃苦，时间长了，就领会了我当年的话。

你留下饭菜，也是给我的？那人哽咽着问。

你脸皮薄，不讨要，会饿死的。他仍一脸平静。

说完，二胡音流出，始如蚊痕，继如流水，最后，如一地灿烂春光。

音乐越来越低，流入地下，渺无音痕。

二胡落下，他也倒下。

你知道是我，为什么不恨我啊？那人抱着他，号啕大哭。

你是我的弟子，我的——知——音。他说，带着一丝笑，咽了气。

那人跪下，恭敬地叩下头去。然后，拿起二胡。月夜里，二胡音如水，波光闪闪，流泻一地。

